

パネルディスカッション2

「小腸疾患治療の最前線」

司会 山本 博徳（自治医科大学内科学講座消化器内科学部門）

中村 志郎（大阪医科大学第二内科）

小腸内視鏡が本邦の医療現場に登場し約20年が経過し、小腸疾患の診断と治療は飛躍的な進歩を遂げている。バルーン内視鏡は、鉗子孔を有することから、各種デバイスを用いた治療が可能となり、これまで小腸出血に対する止血術、小腸腫瘍性病変に対する内視鏡的切除術、狭窄に対する拡張術や術後再検腸管における胆道系処置など各種疾患で応用されてきている。本セッションでは小腸内視鏡を用いた治療について、各治療の成績や問題点の評価、改善の工夫や、新たな展開など、今後の更なる小腸内視鏡治療学の進歩に寄与する多数の演題登録を期待しています。